当クリニックにおける日帰り前立腺系統的生検の検討

いわい中央クリニック　神保裕之

前立腺癌は欧米人に罹患する頻度の高い疾患で、米国における癌罹患率は男性の中で1位、死亡率は肺がんに次いで2位である。本邦においても前立腺癌患者は年々増加傾向で、2025年には男性の悪性腫瘍の罹患者数で第1位になると予想されている。また、この時期には男性の生涯罹患リスクは13%と予想されており、これは男性6-7人に1人が罹患する計算である。将来の高齢化社会に伴って前立腺癌患者の増加が問題となる。

一般的に前立腺癌は外腺から、前立腺肥大症は内腺から発生する。尿道に隣接した内腺から発生する肥大症は排尿症状が早く出現するが、前立腺癌はある程度進行しないと排尿症状を来さないため、早期の段階で発見するためには症状が出現する前にいかにスクリーニングを行い前立腺癌を発見するかが重要である。また、前立腺癌の治療は限局性であれば手術療法や放射線療法、薬物療法によって根治が期待できる。前立腺癌による死亡率を低下させるためには、可能な限り早期の段階で発見し、治療を行うことが必要である。

前立腺癌のスクリーニングとしてPSA測定、直腸診、経直腸エコーがあるが、やはりPSAが一番精度が高く、信頼のおけるスクリーニング法であると考える。しかしながら、PSAの異常値は4以上であるが、4-10ng/mlのいわゆるグレーゾーンでは、一般的な癌検出率は30%から40%（当クリニックでは77%の検出率）と偽陽性が多く存在するため、確定診断である前立腺生検をためらう傾向がある。偽陽性の原因としては前立腺肥大症、前立腺炎が考えられるが、経過観察をしている間に限局癌から局所進行癌、転移癌となってしまう場合があり、積極的に生検を進めるためにも生検のしきい値を下げなければならない。

今回、2018年4月から12月までの間に当院を受診した患者の中で触診または前立腺腫瘍マーカーPSAのいずれかで前立腺癌を疑った43人に対して経直腸的超音波断層法ガイド下に経会陰的に10か所の前立腺系統的針生検を日帰りで施行した．その結果43人中30人(70%)に前立腺癌が発見された．触診で癌が疑われたのは22人でこのうち18人（82%）が前立腺癌と診断された．感受性60%，特異度69%であった．PSAが4.0ng/ml以上は38人でこのうち28人（74%）が癌と診断された．感受性93%，特異度23%であった．
Prostate nonpalpable cancer（触診陰性前立腺癌）が40%, PSAが4.0ng/ml以下で前立腺癌が5人中2人（40%）に認められたことなどから触診所見に異常がなくても，PSAが正常値であっても，どちらかで前立腺癌が疑われた場合には確定診断である前立腺生検が必要である．また，こういった症例では癌の局在がはっきりしない場合が多いので辺縁領域（PZ）に8か所、移行領域（TZ）に2か所の合計１０か所をsystematic（系統的）に生検することは有効な手段の一つと考える．また患者のアドヒアランス向上のためには日帰りによる前立腺生検が有効であると思われた。